

# 共創（コ・クリエーション）から生まれる地域活性化 — 高知市さえんば商店街の事例から —

佐藤 暢\*

(受領日：2023年8月31日)

高知工科大学研究連携部  
〒782-8502 高知県香美市土佐山田町宮ノ口185

\* E-mail: sato.masato@kochi-tech.ac.jp

要約：2015年4月に開設された高知県産学官民連携センター（ココプラ）は、産学官民連携によるイノベーション創出を推進している。その活動のひとつに「高知CCB（コ・クリエーションベース）事業」がある。多様な参加者が集い、地域活性化や産業振興に繋がる事業アイデアを実現するためのチームを結成し、新規事業を生み出すことを目指す取組みである。この事業の成果のひとつに、地域内外の人的交流を促進し、地元の商店街の活性化にも資する交流拠点の構想があった。本事例は、共創（コ・クリエーション）から生まれる地域活性化の可能性を示唆する点が特徴的であり、地域活性化支援策を講ずる観点からも参考になるとと思われる。

## 1. はじめに

今日、地域イノベーションの創出をより効果的かつ効率的なものにするために、産学官民連携活動の質を高める動きが活発化している。広い分野の人々が自主的かつ積極的に交流、協働していく、いわば異分野コミュニティともいべき人的ネットワークの形成も全国各地で行われている。

高知県では、産学官民連携によるイノベーション創出を促進するため、2015年4月に「高知県産学官民連携センター（愛称：ココプラ）」（以下、「ココプラ」とする）を開設した。ココプラは、大学等高等教育機関とつながる「知の拠点」、産学官民がつながる「交流の拠点」、産業振興や地域振興につながる「人材育成の拠点」という3つの機能を有する。このうちの「交流の拠点」について、さまざま行ってきた具体的な取組みのひとつに「高知CCB（コ・クリエーションベース）事業」が挙げられる。多様な参加者が集い、相互に学びあい、支えあいながら、地域課題の解決や産業振興につながる新規事業を生み出す取組みである。

本研究で取り上げる事例は、この高知CCB事業での成果をもとに誕生した。すなわち篠田善典さん

を事業リーダーとする「旅人と菜園場（さえんば）商店街をつなぐ交流拠点（ゲストハウス）運営プロジェクト」である。高知市菜園場（さえんば）商店街を拠点として進められた産学官民連携による共創（コ・クリエーション）の事例を通じ、地域課題の解決や、地域からの新たな価値創造を目指す活動のありようについて考察する。

## 2. 共創（コ・クリエーション）とは何か

コ・クリエーション（Co-Creation）とは、「共創」を意味するマーケティング用語である。英語を直訳すると「Co = 共同の、相互の」、「Creation = 創造」となる。多様な立場の人たちが、利害関係のあるステークホルダーと対話をしながら新しい価値を「共に」「創る」ことがコ・クリエーションの定義であるとされる。

須藤(2016)はコ・クリエーションの手法のひとつであるアイデアソンに着目し、アイデアソンの特徴を概ね次のようにまとめた。すなわち、「参加者の多様性」「アイデアの視覚化」「参加者の総合作用を通じた集合知の活用」である<sup>1)</sup>。以下、主要な記述を抜粋する。

まず、「参加者の多様性」である。アイデアソンの最大の特徴は、組織や所属、職種、専門性のほか、年齢や性別の異なる多様なバックグラウンドを持つ人が参加する場だということである。日ごろからの顔見知りではなく、普段話さない相手や、初めて出会った人、同じ職場であっても業務や所属が違い話をする人が少ない人が、立場や肩書を抜きに、対等な立場で一緒にアイデアを考え、形にしていく。

次に、「アイデアの視覚化」である。アイデアソンは、合意形成や対話を図ることが目的の場ではない。テーマに対して、具体的なアイデアを視覚化し、実装のきっかけを創ることが目的となる。そのため、単にたくさんのアイデアを出せばいいというものではなく、一人ひとりが出したアイデアを、チームでブラッシュアップを重ねながら具体的なアウトプット(アイデアシートや模型、ビジネスモデル、絵コンテ、スキットなど)として手に取れる形で提示することが求められる。

そして、「参加者の総合作用を通じた集合知の活用」である。アイデアソンでは、様々なワークを織り交ぜ、参加者間で相互作用を生み出すことが意図される。参加者それぞれが課題やアイデアを考える個人ワーク、ペアになり課題解決に向けたアイデアを伝え合うペアワーク、チームでアイデアのブラッシュアップやプロトタイプングを行うグループワークを組み合わせ、思考の往還が意識されている。

これらを踏まえ須藤はアイデアソンについて、「多様で異質な知を持つ他者が集まり、コミュニケーションを活発化させることで集合知を生み出す場であり、イノベーション創出を促進する社会的交流の場」と指摘している。前述したとおり、アイデアソンはコ・クリエーションの手法のひとつであることから、これらの特徴はコ・クリエーション全般に適用されるものと筆者は考える。

ちなみにアイデアソン (Ideathon)」とは、アイデア (Idea) とマラソン (Marathon) を組み合わせた造語であり、様々なアイデア創出技法を活用しながら、テーマに基づいた新たなサービスや商品、事業アイデアを創出し、成果を競い合うワークショップを指す。アイデアソンは、多様な人々が、立場を超え、対話を通して新たな価値創出を共に図る「コ・クリエーション (共創)」やイノベーションの創出、クリエイティビティの向上への期待のもと、実施されている。

### 3. 事例研究

#### 3.1 ココプラにおけるコ・クリエーション (高知 CCB)

高知県では、全国より15年先行して1990年から人口が自然減の状態となり、人口減少による経済の縮みが若者の県外流出と地域の衰退を招き、さらに経済が縮むという負の連鎖をたどってきた<sup>2)</sup>。このような構造的な課題を克服するため、尾崎正直知事(当時)のリーダーシップの下、2009年度に高知県産業振興計画を策定した。以来、県勢浮揚に向けた取組みが継続的に推進されている。この計画は、毎年内容がバージョンアップされている。2015年度の計画では、「産学官連携によるイノベーションの創出」が改定のポイントの一つとして掲げられた。その取組みの柱となるのが、新たな事業展開に挑戦する企業や地域を後押しするために2015年4月に開設された「高知県産学官民連携センター(愛称:ココプラ)」である。

ココプラは、高知市中心部の高知県立大学・高知工科大学の永国寺キャンパス内に、県の機関として設置され、大学等高等教育機関とつながる「知の拠点」、産学官民がつながる「交流の拠点」、産業振興や地域振興につながる「人材育成の拠点」という、3つの拠点機能を有する。県内の高等教育機関や県庁の担当者など、産学官民の関係者が日常的に集まり、コミュニケーションを深めることで、高知発のイノベーションを創出し、地域の課題解決と産業振興に繋げることを目指す、文字通り地域の総力を挙げた取組みである<sup>3)</sup>。

このうちの「交流の拠点」は、地域の課題解決のため、産学官民による交流・連携機会を創出する機能である。日常の業務では交流する機会が少ない異分野の方々が集い、交流し、課題解決やビジネスチャンスに繋げるための様々な機会を創出している。「大学等シーズ・研究内容紹介」「経営者トーク」などの機会創出により、参加者間の意見交換や、連携に向けたアイデアの出し合いなどを通じて、具体的な連携につなげることを目指している。

また、産学官民からの受講者が分野を超えてともに学び合い、交流することで、ビジネスのアイデアの具現化や、ニーズ・シーズを事業に結びつけることを目的として、様々なテーマの連続講座が開催されてきた。そのひとつが「高知 CCB (コ・クリエーションベース) 事業」であった。これは、ココプラと株式会社リクルートライフスタイルじゃらんリサーチセンターとの連携による取組である。

#### ○高知 CCB 事業とは

高知をより良くしたいという想いをもち、事業アイデアを提供する「事業リーダー」と、その事業アイデアと一緒に磨き上げる「メンバー」等でチームを作り、相互に学び・支え合いながら、地域課題の解決と産業振興につながる新規事業を生み出し、磨き上げていく事業です。

#### ○本講座の特徴・ポイント

- 新規事業の構想プロセスとプレゼンテーションの基本を学べます
- チームで演習に取り組み、実務に役立つ協働の楽しさと難しさを学べます
- 高知をより良くしたい仲間と交流でき、将来にわたって信頼できる仲間が見つかります
- 地元金融機関や行政キーマンとのビジネスマッチングの機会（プレゼン発表会）や、ココプラ主催のビジネスサポート事業へのエントリー機会もあります

○参加対象：事業リーダーの事業アイデアと一緒に磨き上げる「メンバー」を募集します！

- 地域や社会をより良くするための活動意欲が高い方
- 高知をより良くしたい仲間とともに、自らのビジネススキルを向上させたい方
- 多様な考えや意見を受け入れながらチーム運営の楽しさと難しさを学びたい方
- 講座と分科会に責任持って参加できる方

※応募多数の場合はエントリーシートをもとに選考

図 1. 高知 CCB 事業の概要

高知をより良くしたいという想いをもち事業アイデアを提供する「事業リーダー」と、その事業アイデアと一緒に磨き上げる「メンバー」等でチームを作り、相互に学び・支え合いながら、地域課題の解決と産業振興につながる新規事業を生み出し磨き上げていくことを目指す取組である（図 1～図 4）。

概ね年度の上半期にチームを結成し、約半年の構想検討を経て、年度末には一般公開型の事業プレゼンテーションが行われる。高知 CCB 事業は 2015～2017 年度の 3 年間開講され、計 17 チームが新規事業アイデアについての最終成果報告を行った（事業途中で断念したり統合・再編したチームもあるため、開始当初のチーム数とは同一ではない）、毎年度、様々な事業アイデアが創出されたが、残念なが

第 1 回 6 月 24 日（土）6 月 25 日（日）

< 1 日目 > 事業アイデアの理解とチーム選定  
< 2 日目 > チーム力の形成

第 2 回 7 月 29 日（土）

事業構想シートの理解と磨き上げ（前半）

第 3 回 8 月 26 日（土）

事業構想シートの理解と磨き上げ（後半）

第 4 回 9 月 30 日（土）

事業構想プレゼンとプロトタイプ準備

第 5 回 11 月 25 日（土）

磨き上げの成果を発表する（模擬成果発表会）

第 6 回（成果発表会） 2018 年 1 月 26 日（金）

事業構想のプレゼンテーションとフィードバック

※全体講座は上記 6 回

各回の間にはチームごとの自主的な分科会がある

図 2. スケジュール概要（2017 年度の例）



図 3. 高知 CCB でのグループワークの様子  
（出典：ココプラ）

ら実現に至った事例は少ない。しかしながら、その実現に至った事例のひとつが、篠田善典さんをリーダーとする「旅人と菜園場商店街をつなぐ、交流拠点（ゲストハウス）運営プロジェクト」であった。

### 3.2 さえんば商店街に生まれた「とまり木」

1970 年（昭和 45 年）から続く菜園場（さえんば）商店街は、高知の観光スポット“はりまや橋”から東に徒歩で約 5 分の位置にあり、青果店、鮮魚店、精肉店などの食料品店や、婦人服、履物などの衣料品店、寝具、金物、文具などの小売店、飲食店やクリーニング店など、様々な店舗から構成されている<sup>4)</sup>。パン、漬け物、練り物、惣菜など自家製の食品

## 2015 年度

- ① 外国人への接客サポート ～Welcome と言わせませす～
- ② Shimanto Holiday インターナショナル山村留学～ホンモノの自然で子どもの生きる力を育てよう！！
- ③ 高知海の朝市を作ろう！ プロジェクト
- ④ 高知県の観光情報サイト「よさこいネット」をもっと良くしたいプロジェクト
- ⑤ 手すき和紙学習を高知の学校文化に
- ⑥ 高知移住女子を WEB で発信。移住・定住促進プロジェクト
- ⑦ 高知の四季の風景を食べる旅プロジェクト

## 2016 年度

- ① 高知発！ “バリキャリ女子”のためのパーソナルスムージー
- ② 車がなくても生きていける！ 中山間地域の交通難民を解消 衣食住+医をサポートする南国風良里の“同行二人”（ふたり）サービス
- ③ おうちでほっこり里帰り。生まれ育ったあの町の雑誌と物が自宅に届く！ 「高知ふるさとお届け便」
- ④ 越知町の未来を創造する！ 移住～定住、起業アシストサービス
- ⑤ カンコウ～地域資源を活かしたメンタルヘルス事業
- ⑥ ポクラの村を、ポクラの手で

## 2017 年度

- ① 旅人と菜園場商店街をつなぐ、交流拠点（ゲストハウス）運営プロジェクト
- ② 四万十をまるごと体験できるゲストハウス「minato.」
- ③ Medical Garden TSUBONE（ツボネ） —訪問医療セラピストの特別な居場所—
- ④ 自分らしさを見つけた学生や起業家が集まり、つながる「コリビングスペース OUCHI」

図 4. チーム一覧（2015 年度～2017 年度）

※成果発表会でのタイトルに基づく

も多い。ちなみに商店街の名称である「菜園場（さえんば）」とは、この地域に江戸時代に土佐藩主用の菜園所（野菜畑）があったことに由来している。このように歴史ある商店街であるが、近年では通行量の減少、施設の老朽化、経営者層の高齢化等に対

応するための商店街活性化が課題となっていた。

この商店街の一角に、ゲストハウス「とまり木」が開業したのは 2018 年 2 月のことである。ゲストハウスは鉄骨 3 階建てビルの 1 階と 2 階からなり、1 階は宿泊者以外も利用できるカフェ&バー、2 階が宿泊者向けの客室となっている。経営者の篠田善典さんは高知の出身で、会社勤めなどを経て 2015 年に高知に U ターンした。もともと旅行好きであることもあり、「宿を経営したい」という想いと、「高知を元気にしたい」との想いから、宿泊者と地元の人々が交流できるようなゲストハウスを考えた。この想いを具現化するため、2017 年度のココプラ「高知 CCB 事業」にリーダーとして名乗りを上げ、志を共にするメンバーとともに事業構想を練り上げた。

た、経営面での知識補強のため、同じくココプラが主催している「土佐経営塾」に参加、起業の準備を進めてきた<sup>5)</sup>。ここで「土佐経営塾」とは、高知県内で事業を行う経営者（又はそれに準じる方）や、新たに事業を起こしたい方を対象とした、経営に関する基礎知識とともに経営者に必要な考え方や姿勢を学ぶ講座である。ケース（事例）教材を使用し、当事者の立場で講師や受講生同士とで徹底的なディスカッションを行う「ケースメソッド」の方法で授業を行う点が特徴である。

## 4. 考察 ～共創と地域活性化～

### 4.1 リーダーが描く構想と、その実現

篠田さんの想いは、概ね次のようであったという。すなわち、もともとの思いは「商店街活性化に繋がる取組み」であり、より具体的には、①素泊まり形式であること、②そのため商店街で買い物や飲食をしてほしいこと、③そのような機会を通じて地域の店の人々と交流してほしいこと、などが念頭にあった。つまりゲストハウスとして持つべき機能は、次の 3 つに集約される。①地域外からの訪問者の滞在機能（まず地域に留まる）、②地域（さえんば商店街）との接点としての拠点機能（ベースキャンプ。ここから地域に出ていき、繋がる）、③地域の方々との交流機能（繋がり広がる）

このことにより、①商店街を行き来する人が増え、商店街が活気づく、②地域内外の交流が盛んになり、さまざまなアイデアが創発される、③この創発において、ゲストハウスが「ハブ」として機能する、ことなどを狙っていた。その後、これら交流をさらに推進するため、カフェ&バー（立ち寄り機能）を追加した。このことで、地域の人々も「とま

り木」に入って交流できる機能が追加された。

このように地域内外の交流が盛んになることで、交流人口増加による地域活性化や、アイデア創発による地域活性化を促進するとともに、人と情報の交流がさらに活発になることでエコシステムのようにイノベーション（新たな価値創造）の誘発も図れるのではないか。

#### 4.2 構想の実現を行政的に支援

本研究で取り上げた事例は、産学官民の共創（コ・クリエーション）による地域活性化の取組みであるが、事業を構想した主体者（篠田さん）と、その構想の支援者（ココプラ）のそれぞれの視点から、次のようなことが言える。

まず主体者の視点であるが、構想の原点は「宿をやりたい」という想いであった。いっぽうで、「商店街を活性化したい」という想いもあり、そこで組み合わせると良いかもしれない、というのが着想点であったという。

- まずは商店街の受付（玄関）を目指し、ゲストハウスを運営する。旅人、地元の大学生、商店街の方々が集まれるような場づくりを目指す。
- そして商店街の人通りを増やす。常に人通りでにぎわうような商店街づくりを目指す。

自らが思い描く「宿」と「商店街」、そして地域の活性化。これらを実現するために活用したのが、高知 CCB（コ・クリエーション）事業であった。そして高知 CCB 事業という交流の場において、多様な参加者によるチームが形成され、主体者のアイデアが可視化され、チーム内外での相互作用を通じた集合知が形成され、商店街が持つ資源や機能とも存分に連携、協力したゲストハウスが実現した。ゲストハウスは単なる「宿泊施設」ではなく、商店街と宿泊者という、地域の「内」と「外」を繋ぐ機能を果たした。とりわけ1階にあるカフェは、地域内外の交流拠点として機能していることは特筆できる。

次に支援者の視点であるが、地域イノベーション創出のため高知県が設置したココプラ（高知県産学官民連携センター）という、いわば公共サービス機関が、イノベーション創出の具体的手法として共創（コ・クリエーション）の概念にもとづく高知 CCB 事業を立ち上げ、地域活性化（商店街活性化）にも繋がりスタートアップ（新たなゲストハウスの創業）の実現を支援した。

主体者（篠田さん）としては地域活性化にも繋がるスタートアップを立ち上げたいという想いを実現し、支援者（ココプラ）はその想いを行政施策の

面から支援した。このような観点からも、産学官民による共創（コ・クリエーション）を支援、促進することは、地域活性化に係る政策面からも有効と考える。

#### 4.3 ネットワーク形成から起業支援へ

しかしながら高知 CCB 事業は3年間で終了した。当時の資料や関係者の話を踏まえた筆者なりの理解としては、高知 CCB 事業は、人と人とのネットワークづくりや、アイデアを形にしていく手法を学びあう研修講座の位置づけであった。すなわち、「アイデアを磨き上げていくための手法」や「アイデアを実現するための仲間づくりの秘訣」といったことを学ぶ場である。もとより、アイデア創発からビジネス実現までは距離があるが、高知 CCB 事業は、必ずしもビジネス実現を目指すものではなかった。したがって、事業としての明確な成果を打ち出しにくいという側面があったようである。半面、上記のような「学び」については、受講者からの評価は高かったようにも思われる。

また、当時ココプラでは「ビジネスプランコンテスト」という取り組みも行っていた。こちらは文字通り、ビジネスプランを持ち寄り競い合う場であるが、「アイデアやプランを磨き上げる」といった観点からは重複性も否めず、このことが高知 CCB 事業の位置づけを明確に打ち出すことが困難であったようにも思われる。

見方を変えれば、高知 CCB 事業を通じて、ココプラすなわち産学官民連携によるイノベーション創出の推進のためには、「ネットワークづくり」や「アイデアの磨き上げ」に加えて、「起業支援」や「起業家ネットワーク形成」という課題が浮き彫りとなり、そのことが「こうちスタートアップパーク」（KSP）に繋がったという整理は可能であろう。KSPは2017年に開始された取組みであり、高知県で起業や新しい事業に取り組む者を支援するプラットフォームとして、現在も継続している<sup>6)</sup>。敢えて高知 CCB 事業との違いを挙げるならば、KSPには高知 CCB 事業のような「リーダー／メンバー」のコンセプトは無く、起業を目指すリーダー（あるいはリーダー候補者）のネットワークづくりを促す基盤（プラットフォーム）といったことであろう。

#### 5. おわりに

歴史ある商店街、地域コミュニティの一角でゲストハウスを営むことになった篠田さんであるが、当初から地域とのより強いつながりのあり方を模索

していたという<sup>5)</sup>。宿泊客の多くは県外者なので、ゲストハウスにバーを併設して近隣の人たちとの関わりづくりに努めながら、「高知の食の魅力、人の魅力」をもっと知って欲しいという想いを強く持つようになった。そしてそれを実現するための人的リソース（つまり自分に代わって担ってくれる人材）を模索した。翌年の「土佐経営塾」にOBとして事業報告を行ったところ、「飲食に関することで、とまり木で関わりたい」と名乗り上げた方があり、1階のカフェの経営を任せることにした。そして2019年2月、ゲストハウスインカフェ「カネナカ」がオープンした。

2020年3月以降のコロナ禍により、宿泊業であるゲストハウスは大きな打撃を受けたが、2020年3月には、個室型ホテル「Shu（シュウ）」を、菜園場商店街の中心部2号館としてオープンさせた。その後、ゲストハウス「とまり木」としては、2022年3月末を持ってドミトリー営業を終了し、「とまり木2階の部屋」という新たな宿泊サービスを提供することとなった。なお、1階は飲食店舗としての運営を継続している。

篠田さんは起業家として、自分が好きな宿という「場」のもつ可能性を今後も追求し続けていきたいという。今後のますますの活躍が期待される。

## 謝辞

本研究の実施の実施に当たり、ゲストハウス「とまり木」オーナーの篠田善典さんには、資料提供やインタビュー調査など、日々ご多忙の中でご協力をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

## 引用・参考文献

- 1) 須藤順 (2016), コ・クリエーションにおけるアイデアソンの可能性：高知県での取組みから, Collaboration, Vol. 6, pp. 19-30.
- 2) 尾崎正直 (2015), “産学官民連携によるイノベーション創出,” 産学官連携ジャーナル, Vol. 11, No. 7, pp. 3.
- 3) 佐藤暢 (2016), 高知の産学官民連携～ココプラの取組みを中心に～, 高知工科大学紀要, Vol. 13, No. 1, pp. 1-9.
- 4) 高知県商店街振興組合連合会ウェブサイト, <https://www.kochi-shotengai.net/>.
- 5) NPO こうち企業支援センター (2020), 土佐経営塾が結んだふたつの“物語,” 土佐経営塾通信 [セ

ッション] Vol. 1.

- 6) こうちスタートアップウェブサイト, <https://startuppark.org/index.html>

# **A Regional Development and Vitalization Activity Arising from Co-creation**

## **— The Case Study from Saemba Shopping District in Kochi —**

**Masato Sato\***

(Received: August 31st, 2023)

Research Support and Social Coordination Division, Kochi University of Technology  
185 Miyanokuchi, Tosayamada, Kami City, Kochi 782–8502, JAPAN

\* E-mail: [sato.masato@kochi-tech.ac.jp](mailto:sato.masato@kochi-tech.ac.jp)

**Abstract:** The Kochi Regional Collaboration Center (Kocopla), which was established in April 2015, promotes the creation of innovation through industry-academia-government collaboration. One of its activities is the Kochi CCB (Co-creation Base) Project. This is an initiative that aims to create new businesses by gathering diverse participants that form teams to realize business ideas that lead to regional revitalization and industrial development. One of the results of this project is the concept of an exchange base that promotes exchanges between people inside and outside the region and contributes to the revitalization of the local shopping district. This case is unique in that it suggests the possibility of regional revitalization arising from co-creation and is considered to serve as a perspective reference for devising measures to support regional revitalization.